

品だ。ドラマでは、主人公が日本人の子であるがゆえに周りからいじめられ、文化大革命ではつるし上げられて、辺境へと流される。等しく、時代に翻弄された中国人養父が、最後まで彼を守り抜いた姿が美しい。そして、中国共産党のなかに

呼び、実父からの日本移住への誘いを断り、若い頃に流されていた内蒙古での勤務を志願する。だが、ここに至るまでのシーンでは上海や北京の豊かさや対照的に、執拗に貧困や流刑の地としての田舎が描かれる。これは、中国の現実だったろう。現実との闘いに、自ら

好になっても変わらない。主人公は常に「日本のスパイ」として疑われ叱責される。

私は1990年代から20年間、「改革・開放」により、自由闊達な中国を見てきた。友人たちの多くと腹を割って議論をし、いろいろルールはあるけれど我が

## 再見！ 大地の子 (前編)

も理解者が少なからずいた。ドラマを25年ぶりに見た。以前は感じなかった印象が二つ。一つは、内蒙吉など「辺境」に対する差別的な言動が満ち溢れていること。エンディングで、主人公自ら「大地の子だ」と

らの運命を委ねようとする主人公は、中国共産党にとってもヒーローに違いない。もう一つは、どの時代でも密告が奨励され、異分子が「スパイ」として疑われ

国よりよっぽど自由にものを言えるかも、とさえ思っていた。私の見方は楽観的過ぎた。10年ほど前から違和感が強まる。



どこまでも続く内モンゴルの草原

日、これは副所長による所長への「スパイ」告発が原因と判明。共産党の然るべき筋が査問し、所長の「スライ」容疑は晴れたが、両手

司を告発する。これは中国共産党の文化なのか？

いまの中国はどうだろう。新疆ウイグル自治区、香港をめぐる問題で、当局が国民への弾圧を続けているとするニュースが日々流れてくる。我が国にとっても無縁ではない。2013年以来、中国に一時帰国した日本で勤務する中国人学者らが次々と拘束されてきた。ほぼ「スパイ」容疑。

昨日9月、岩谷将北大教授が北京で拘束された事件も記憶に新しい。日本人ビジネス関係者らがこれまでも拘束された事実は周知とはいえ、中国社会科学学院から招待された日本人学者までもが拘束されたことに戦慄が走った。教授は幸運にも11月に解放(ただし、教授

が罪を認め、猛省したと中国側は強調)。

同日、私の知人で中国籍の北海道教育大学教授が、昨年5月から中国・長春で行方不明だと北海道新聞がスクープした。中国政府は事実を認めず、知らぬ顔が続けてきたが、今年3月に10カ月にわたる沈黙を破り、袁克勤教授の名前を挙げて拘束を認めた。容疑はもちろんスパイ罪。「教授は罪を認め、すべてを告白した。今から裁判が始まり、教授は法的な権利をすべて認められる」と。だが、袁教授は失踪以後、いまだ公の場に姿を現していない。そして袁教授の生存を確認するすべもない。

(北海道大学教授)

NHK開局70周年を記念し、1995年に日中共同で制作された「大地の子」(原作・山崎豊子)を覚えておられるだろうか。敗戦に直面し、ソ連軍に蹂躪された満州開拓団の子ども(上川竜也)が残留孤児となり、中国でさまざまな苦難を抱えながらも生き延びて日本に戻っていた父(仲代達也)と上海で巡り合う、スケールの大きい感動的作

稀なことだと思ったら、後

者とも人事で動かされた(あらぬ告発をした副所長は左遷)。互いに友人のふりをしながらも、職場で相手を監視し、出世のため上